

## 「カラマーゾフの兄弟」とシラー

海老澤 君 夫

上記のような表題を掲げて出発しても、ロシア語を理解せざる者はドストエフスキーについて語るべからずといわれれば、この文は本来ここより前に進むことはできない。しかしこの報告書を作っているグループは一般教養の総合科目「テキストの力」の担当メンバーからなり、またそのメンバーの多くは専門教育科目の欧米文学論にも属している。そしてこの教育科目に属している者は、いつかは自分の「専攻」の文学から抜け出してこの科目の講義や演習を担当し、欧米全体の文学について何かを語らなければならない。つまりは遅かれ早かれ「資格」なくしていろいろなテキストを読み、他人の縄張りの中に入っていくという冒険、そこで今まで自分が扱ったことのないものを扱うという冒険をしなければならないのである。

### 1

このテーマに関して言えば、うつむきながら、しかしこのように何かの口実を設けてかの一線を越えるという「冒険」をなしてしまえば、あとは冒険というよりはむしろかなり踏み固められた平坦な道を歩いていくことができる。というのもこのテーマは決して新しいものではなく今までにもしばしば論じられてきたものだからだ。筆者の手元にはペターソンの「ロシアにおけるシラー」(1934)、チジェフスキーの「シラーと『カラマーゾフの兄弟』」(1929)、コストカの「ロシア文学におけるシラー」(1965)、リングスタドの「ドストエフスキーとシラー」(1975)、井桁貞義氏の「シラーとドストエフスキー」(1978)<sup>1)</sup>等が置かれている。残念ながら——しかもこれは致命的なことなのだが——ロシア語の文献は目にすることができないし、またたとえ目にしても理解することはできない。ここでまたもやうつむかざるをえないのだが、しかしロシアでの研究成果は上記の文献の中に盛り込まれているのだ、また今はやはり興味が方が慎みよりはるかに大きくてそれを抑え切れぬのだと自分に無理に言い聞かせつつ、そのまま先に進むより他はない。

上記中ペターソンはその著書の中でロシアとドイツ、特にヴェルテンベルク公国との関係等に言及しながらシラーがまだ存命だった時期のロシアにおける彼の作品の扱いを論じ、コストカは主として19世紀ロシア文学に与えたシラーの影響を各作家ごとに章を割り当てて詳しく語った。チジェフスキーはテーマを「カラマーゾフの兄弟」とシラーの関係にしぼってこれを細かく論じ、リングスタドはこれらすべてを考慮するのみならず、他の多くの資料を使ってドストエフスキーの作品全体とシラーの関係について論じている。ちなみに彼女のこの著書は正味

110 ページだが、その中では序文および結論に10ページ余、ドストエフスキーの初期の作品のいわゆるシラーイズムに13ページ、「地下室からの手記」及び「白痴」の中のシラーに25ページ、そして「カラマーゾフの兄弟」の中のシラーに約60ページを割いている。関心の半分、あるいはそれ以上が「カラマーゾフの兄弟」に注がれているこの構成は、おそらく今までこの二人の作家の関係に注がれてきた関心一般の標準的な配分といえるかもしれない。

これらの著書および論文の中では、そこで一番早いチジェフスキーのものからして既に次のことが分かっており、それらはその他のものにあっても共通の知識となっている。すなわち、ドストエフスキーはすでに子供の時にシラーの「群盗」を見て大いに感動しており、それ以来熱烈なシラーの賛美者になっていること。当時はベリンスキー等の若い文人たちが等しくシラーの賛美者であったこと。青年時代ドストエフスキーは兄のミハイルとシラーの全集の翻訳出版を企画した、そしてその実現というには程遠かったが、ともあれミハイルは「群盗」、「ドン・カルロス」等を訳していること。晩年においてもしばしばシラーについては語られ、とりわけ最後の公式の場ともいえるプーシキン像の除幕式における講演でも彼の名が挙げられていること。若い時代の手紙やその当時を述べた後からの回想とは違い、初期の作品中ではシラーの名が直接に挙げられることはないこと。シベリアから帰ってからの作品、「虐げられた人々」あたりから彼の名が登場人物によって挙げられ、同じことはさらに「地下室からの手記」、「罪と罰」、「未成年」等においてなされていること。しかしこれらの作品におけるシラーの名は多くの場合アイロニカルな形で、つまりその話者から見て幾分は否定的な形で挙げられていること等々……。さらにこれらに対して最後の作品「カラマーゾフの兄弟」においてはそれまでと違いもっと集中的な形でシラーが言及されていることも分かっている。

この作品「カラマーゾフの兄弟」では、シラーの名前が挙げられるだけではなく彼の詩句の引用もしばしばなされている、しかもそれらが作品の重要なテーマと結びついているというのだ。チジェフスキーは論文のテーマそのものがシラーと「カラマーゾフの兄弟」の関係であるだけに、この作品における多くのシラーの痕跡を集め、それらを分析することに努めている。彼はしかしその際、作者自らがそれと記したシラーの痕跡の方はそれを挙げるにとどめ、全体の約3分の2弱にあたる約25・6ページをシラーの作品との内的関連の指摘にあてた。すなわち第5章でより高い位置の人間 (höherer Mensch<sup>21</sup>) について11ページ、第6章で弁神論について4ページ、さらに第7章で höherer Mensch が持つ悪魔的分身との二重性について10ページにわたって語られている。第5章及び7章には論題から見れば幾分書き過ぎと思われる所もあるが、語られていることは十分に興味を呼び起こしてくれる。コストカはドストエフスキーに割り当てた35ページのうち約15ページをこの作品への言及にあてたが、無駄のない形で語られているだけに作品上に現れたシラーの具体的痕跡のほとんどがこの中に集められている。

リングスタドは前述のように60ページの紙面をこの部分にあてたが、細かい文字で書かれたこれはチジェフスキーのもの比べ、ページ数の見かけの差よりはるかに多くの情報量を持っている。彼女はシラーの影響をテーマおよびモチーフの部と登場人物の性格の部に分けた。そして前者に関しては「群盗」からのモチーフ (父殺し、弁神論および子供の虐待等の弁神論に

関連するモチーフ)、讃歌のモチーフ(洞窟のモチーフ、歓喜のモチーフ、いのちの杯のモチーフ等)、両作家における神秘主義的要素(自然と人間の神秘的結合、星辰と精神の平行関係等)、より高い位置の人間(higher man)のモチーフの四つを扱い、後者にはイワンおよび大審問官、ドミートリイ、そしてアリョーシャおよびゾシマ長老の三つに分けて各々の人物におけるシラー的要素を詳しく述べている。またドストエフスキーの全体とシラーの関係を論の対象としている井桁は、論文の全体を先ず「作品の外から」と「作品の内部から」に分け、主要な部分である後者をさらに美と崇高——美しき魂をめぐって、大審問官伝説——主体の自由をめぐって、生への歓喜の三つのテーマに分けている。そしてその際はとりわけ後の二つのテーマで「カラマーゾフの兄弟」がクローズアップされる。

紙面が制限されているにもかかわらず他の論文の内容や構成を記しているのは、そのことによってこのテーマにあってはすでにあまり新しい資料的事実は語れない<sup>3)</sup>、まとめ方 資料の位置付けの仕方——これもかなり固定化されてきている——だけが問題だということを述べたいからである。しかしそのようにまとめ方だけが問題だというのなら、シラーの名や彼の詩句を小説の中に新しく探すのはもはや無理な、ましてやテキスト外のデータを使っての二人の関連性の証明などは無理な筆者にも何かを語る余地が出てくる。すなわち今までのものではその関連性がどちらかというテーマ別に、しかもそれが並列的に扱われていると思われるので、ここではそれとはっきり表示された形でテキストに現れた部分、特に「群盗」との関係にこだわり、それを「カラマーゾフの兄弟」におけるシラーの痕跡を語る際の核、あるいは輪郭としながら、この作品とシラーの関係をまとめる方法をとってみようと思うのである<sup>4)</sup>。

## 2-1

「カラマーゾフの兄弟」におけるシラーの意味がドストエフスキーの他の作品のそれに比べて格段に大きいということは、テキストを一度見ただけでもすでに分かる。すなわちそこにはシラーの名が挙げられるのが一度や二度ではない。またそれがたまたま一人の人物に言及されるというのではなく主要人物中のかなりの人々<sup>5)</sup>に言及される。登場人物のみならず語り手自身もその名を挙げている。シラーの詩句が幾度か引用されている。そしてそうなるのは作品の一部分だけではなく比較的広い範囲においてである等々……。またシラーの作品を読んだことのある者がこの名前付きの引用を見、そしてさらに作者がシラーに多くの関心を持っていたという前提に立ってもう一度テキストを見れば、その他の部分にもこの作品とシラーの作品のいろいろな共通性、すなわち登場人物の性格付け、プロット、モチーフ、テーマ上の共通性を見いだすことができよう。

またこのシラーの意味の大きさは別の面からも見ることができる。すなわちその他の引用に比べても彼の引用はその回数が目立って多いということだ。集英社版の江川訳<sup>6)</sup>には本文中の注のほかにもかなり大部の後注がついている。ここでは本文中にある他からの引用がかなり細部まで指摘されており一種の引用句索引として利用できるのだが、この後注等を参考にしてみ

るとシラーの引用は聖書（特に福音書）からの引用に次いで — 聖書からの引用は至る所にあり、その回数は群を抜いている — 多いことが分かる。プーシキン、レールモントフ、チュッチェフ、ネクラソフ、シェイクスピア、ゲーテ等も幾度か引用されるが、回数的に見てやはりシラーの引用には遠く及ばない。またこれらの引用とシラーの引用との間にはかなりはっきりした違いがあるようにも思われる。すなわちシラーの引用は他のものと違って多くは直接にその名が挙げられているということ、そして何よりも他の多くのもののようにいわば行きずりの引用ではなくて大概は作品のその場のテーマと深く結びついていることである。

「カラマーゾフの兄弟」におけるこれらのシラーの引用、あるいは痕跡は次の三つに分けることができる。第一の種類に属するのは名前が直接に挙げられる場合、これは大きく分けて四箇所あり、最初のもはフォードルが息子二人と自分を「群盗」の登場人物になぞらえて紹介する場、二つ目はドミートリイが「エレウシスの祭り (Das Eleusische Fest)」と「歓喜に寄せて (An die Freude)」の詩句をシラー作とことわってアリョーシャの前で引用する場、三つ目はイワンによる「手袋 (Der Handschu)」からの引用の場で、ここではシラーの詩句であると彼からは直接に語られないが、語り手によってそれがそうであること、そして聞いていたアリョーシャもそうと分かったことが述べられる。そして最後が裁判の場で、ここではドミートリイの性格の言及のさいに検事と弁護人の双方からシラーの名が挙げられる。第二の種類のもはシラーの名が直接挙げられることなくその詩句が引用される場合で、これはインテリイのイワンによってなされることが多い。上記の「手袋」も本来はこれに属するものといえようが、それを除いても意味の重い引用がまだ残る。さらにフェチュコーウィチは弁論の際、「群盗」におけるフランツのある科白をもじりながら父親論を語るし、また軽い形のものだがフォードルやドミートリイにもこの種の引用が見られる。最後の第三のもはシラーの名もその作品名も直接は記されることがないが登場人物の性格、プロット、テーマ等の側面から考えて関係がありそうなもので、しばしば挙げられるドミートリイと「歓喜に寄せて」、イワンの「大審問官」と「ドン・カルロス」、アリョーシャとシラーのいう美しき魂との関係、さらにチジェフスキーやリングスタドの挙げるその他の内的関係、あるいは関連するモチーフである<sup>7)</sup>。

この中で最も意味あるもの、そして興味あるもの、何かを語りやすいものはもちろん第三の種類のもだ。上記の二人の論も多くはこの部分にページ数を割いている。しかも指摘されたものはすべて興味あるものだし、うなずけもするものだ。しかしこれらは関係ありそうなものであってもシラーの影響によると確実にいえるものではない。ことが抽象的なテーマに入って行けば行くほどその中の要素間の関係は複雑になり、作品制作中の作者の精神の要素別分析は難しくなるからだ。作者の、しかもある程度年をとった作者の脳裏には、それまでに接した古典、同時代の作品、古今の諸思想等をもとにしたいろいろなイメージが混在し、それも無意識のうちにいろいろな形に変形されている。しかもそれらはさらに作者の生活上の個人的感情、周りの諸々の問題への関心、読者の関心や検閲等を考慮した構成上の戦略などからさらに意識的に変形されるのだ。ドストエフスキーに影響を与えた西欧の作家の第一がコストカ等が言うようにシラーであったにしても<sup>8)</sup>、彼がその他にも多くの作家に接していたことからして、こ

とがただちにシラーの影響とは言い切るのには難しいであろう。

結局無難なのはテキスト内で確実に表示されたものを基にしたの指摘ということになるのだが、そうなるはずの意味をもって来るのは先に第一、第二の種類の痕跡として挙げたものだ。これらは一見断片的でテーマ的にさ程まとまりがないように思われる、が、少し視界を広げて見ればこれらを支える何らかの足場は見出せるようにも思われるのである。

この種のものは作品の比較的前の方に多い。そしてその最初のものが周りも当然「群盗」を知っているかのような、フォードルによる息子二人と自分の紹介の場だ。我々はすでにここで——ほど経てこれがまたフォードルに意味あり気に言及されるのとあいまって——「群盗」とその作者シラーを記憶せざるをえない。我々はその後、イワンの「手袋」からの引用を聞いてアリョーシャはイワンが詩句を暗記する程にシラーを読んでいることに驚いたなどという語り手の説明をも聞く。それを聞き我々読者の方はむしろ——その前にシラーを引用しつつドミートリイが彼を相手に心の内を語ったのをも知ってはいるのだが——アリョーシャもまたそう判断できる程にシラーを知っているのかと驚かざるを得ないのだ。ともあれシラーの名が挙げられる時はすべて、ここでは登場人物の世界でも読者の世界でも彼の名前やその作品は常識だといわんばかりであり、またあたかもそれによって彼シラーがほとんどの登場人物に関係していること、そしてそのことを考慮すべきであることを読者に喚起するかのようである。

ところでこの「群盗」の引用ははっきりと名を挙げての最初のシラー引用であるにとどまらず、それが多くの人々の前でなされ、そして一度ならず、また複数の人物によって<sup>9)</sup>なされている。さらにこの主たる引用者が一筋縄ではいかないフォードルであることや、この作品の制作期に作者がある手紙で回想的に自分が少年時代「群盗」に感激したこと、それが自己の精神形成上いい影響を与えたことについて語っていたり<sup>10)</sup>、自己の子供たちに一度ならず「群盗」を読んで聞かせた<sup>11)</sup>等という事実ともあいまって他の引用より興味の深いものだ。こんなことからこの「群盗」は「カラマーゾフの兄弟」中のかなり深い所までくい込んでいるように見えるのだが、ここでは先ずそれがどの程度なのかを見てみようと思う。

会合の場である長老の部屋でフォードルは他の出席者に対し、イワンをいわば「群盗」における「尊敬おくあたわぬ（尊敬しないわけにはいかない・筆者注）」カール・モール、ドミートリイを「もっとも尊敬できぬ」フランツ・モール、そして自己はそれらの父、フォン・モール伯爵だと紹介する。しかし「群盗」を読んだことのある読者なら、この段階ですでにこの対比が必ずしも的確ではないことに気がつく<sup>12)</sup>。そして我々のこの印象はことが先に進むにしたがって強くなるのだが、このことはしかし表に現れるほどには彼フォードルの言、あるいは作者の意図と隔っていない。というも少し読み進めば分かるように、フォードルの言葉は一義的であることは決してない、すぐ後に正反対なことを語ってもいずれも偽りとはいえないという体のものだからだ。物事を、そして自己自身をさえシニカルに見、一切の精神的権威、聖なるものを否定的・嘲笑的に見る癖についてしまった彼だが、しかしそれだけにそれらを多面から見てはいるのだ。

彼の利害関係からいえば自己を害そうとするドミートリイが「もっとも尊敬できぬ」者であ

り、それに比較すれば他方のイワンが「尊敬おくあたわぬ」人なのは当然のことだ。が、彼は一方ドミートリイとイワンの自分に対する関係をそう単純に割り切ってもいない。かかる会合のあったその日のうちに彼の口からは「……あっち（ドミートリイ・筆者注）より、イワンのほうがこわいんだ……」<sup>13)</sup>と語られるし、また次の日ともなれば「あいつはミーチャのいいなずけを横取りしよう……」、「あいつがここに乗り込んできたのは、俺をひそかに殺すためじゃあるまいか?」、「……イワンはほら吹きだな、何の学もありゃせん……それに格別の教養もないし……」、「……卑劣なやつだよ、イワンてのは! …」<sup>14)</sup>等、フランツを語るにこそ似つかわしい言葉が語られるからだ。もちろんイワンはその間に彼にこう言わせる特別な何かを——少なくとも彼にそれと分かる形で——やっているわけではない。フォードルはもともとカールとフランツの間に自分で言うほどの差を認めてはいないようだし、ドミートリイとイワンの間にも自分との関係に関するかぎり大きな違いは認めていないようだ。仮にこの対を反対にして語ったとしても彼にあってはその意味はあまり変わらない。むしろイワンがフランツ、そして結果的にはドミートリイがカールだとさえ言いた気である。これは最初からしてそうであり、少なくともイワンには父が言った通りには聞こえなかったろう。彼は僧院からの帰り道で父から「……尊敬すべきカール・フォン・モール君」ともう一度語りかけられた時、相手を蔑む様に首をすくめる。首をすくめたのはもちろん直前の不愉快な出来事のためでもあろうが、ともあれここではイワンをカールと呼ぶことがすでに皮肉であり、イワンもまたそのことを知っている<sup>15)</sup>。

フォードルにこう言わせるのはもちろん作者で、彼は読者に一瞬この対比をけげんに思わせて後々もこの対比を忘れぬようにさせたいのかもしれない。作者は——フォードルの言とは関係なく、あるいは同じことだが、遠回しに関係させて——イワンとドミートリイが他人に要求する「尊敬」の度合いにもカールとフランツの場合より差をなくすよう努め、さらにいつの間にか二人をすり替えているのだ。

## 2-2

この作品「カラマーゾフの兄弟」のあらすじのいわば外枠を形づくっているのはカラマーゾフ家の父フォードルが殺されること、犯人として長男ドミートリイが逮捕されその裁判を受けること、いわば父殺しであり、またその内容をなすものは結局は神をめぐる論争である。小説としては異常と思われるほど、すなわちそれが場の設定のためのト書に過ぎないと思われるほどに語りの部分が少ないこの小説は、多くの場合——その形と程度こそは違え——いずれも「マドンナの理想」と「ソドムの理想」を同時に有するカラマーゾフの人々の間の、あるいはこの人々についての会話の形であらすじが展開する、そしてその会話ではたびたび神の存在が問題になるのだ。もちろんこの外枠と内容とは密接な関係を持っている。すなわち真犯人スメルジャコフの「父」殺しは、神がいなければすべてが許されるという考えとの密接な関係のもとに行われるからだ。

この外枠と内容、およびそれらの関係に注目する時、二人の息子と父の関係がいわば相似で

あるとされた「群盗」がもう一度思い出されるのだ。もちろんこの作品は「カラマーゾフの兄弟」に比べれば登場人物の性格上の矛盾も多いし、筋を進展させる上での至らなさも多い。これを劇場で見て舞台上で語られる言葉の雰囲気呑みこまれるのでなく、少し距離を置いて読んでいく時など、これらの至らなさがよけいに目につく。しかしここにおいても結局は父への反抗・父殺しと神の存在が問題になっている。ここにもうぶで単純な、そして生のエネルギーに満ち満ちて無軌道な生活をしている兄と、知力、というよりははかりごとの力に勝る、しかし人を愛することも人と交わることもできぬ弟がおり、そしてこの弟が兄の地位を脅かし、兄の許婚を自分のものにしようとしている。ここでも息子たちの双方が父殺しに、片方は積極的に、もう片方も結果的には関わる。そしてこの父殺しは容易に無神論と結び付くのだ。秩序の無視の最たるものの父への反抗・父殺しは倫理の無視、神の無視へと通じるからである。

兄弟二人の行動は様こそ違え等しく秩序への反抗だった。兄は冷静さを失った状態から父を恨み、その結果として秩序の破壊へと進んでいくし、弟は冷徹な計算に基づいた陰謀によって兄を廃嫡させ、さらに父を殺して領地の支配者になろうとする。しかし兄弟の双方においてこの父殺し・秩序と神への反抗・無神論は敗北し、秩序が勝利するのだ。すなわち兄は反抗に入っただけに至る所で自分の気持ちと行動の矛盾に出くわし、遂には反抗に疲れ果て、あるいは人間の自然性の自覚、および内部からの秩序志向の気持ちとの葛藤に敗れて、結局は——それが主観的には人間の秩序ではなく神の秩序であったにせよ、ともあれ——秩序に戻っていく、そして弟は一時は目的に達したものの、それを保ち、さらに最後まで押し進めることができない、消すことできない神への恐れ、つまりは神の復讐のために精神を犯され、遂には自殺して果てるのである。

フォードルは自分はさしずめフォン・モール（von Moor）伯爵だと言う。この時フォードルは、あるいは彼にこう語らせる作者、登場人物の名前の意味に敏感な作者ドストエフスキーは Moor が泥炭地や沼沢地を意味することを意識しなかったろうか。カラマーゾフの名の意味としていろいろ考えられるが、何よりも「黒いものを塗ること」だといわれている<sup>16)</sup>。それが小説中であたかも普通名詞のように扱われ、カラマーゾフ的という形容詞さえ使用されるようになった、しかもこのカラマーゾフ的とは単に父フォードルやさしあたり彼に最も似ているドミートリイについてだけではなくイワンやアリョーシャについてもいわれている。とするとそこに単に淫蕩や無軌道、破廉恥、道化性等だけではなく、無神論や澆神、感傷性、無邪気、そして聖痴愚（ユロージヴィ）、さらに敬虔さなどの意味も含まれることになる。自分や息子たちの諸性質、そしてその内面の諸要素をかなりの確に見ているフォードルは、モールと言った時にその名前で単なる名前以上のもの、混沌とした、あるいはドロドロとしたカラマーゾフ的なものを意味しはしなかったであろうか。

というのも自分がさしずめそうであるといったこのモール伯爵は「群盗」において——舞台上での彼の言動を見るかぎりには彼は確かに弱々しい、そして人の良さそうな人物なのだが——結局は双方の子供から恨まれ、そしてそれを通じて双方の子供たちを破滅に押しやっているの

だ。1幕1場で語られるフランツの父への恨み言は — これに影響を与えているらしい「リア王」のエドモンド<sup>17)</sup> のいわば明るい悪党の科白とはおおいに違い — 幼少から父によって重ねられた兄と比べての差別感でずっしりと重くなっている。父モールはそれゆえ過去において息子フランツを精神的に虐待している、少なくとも息子にはそう受け取られているのだ<sup>18)</sup>。そして息子にそう思われているという点では相手がカールの場合でも同じである。カールが盗賊となるきっかけは後悔の念と許しへの懇願とを書き記した彼の手紙に対して — 弟の陰謀によるものではあれ、とにかく — 父が冷たい態度をとったことだからだ。父への反逆という点ではカールもフランツも大差はない。

「カラマーゾフの兄弟」では父の存在が「群盗」の場合よりはクローズアップされて二人の兄弟の接する基板を厚くしており、同時にスメルジャコフを新たに登場させて父殺しの原因をより複雑、かつ内面的なものにした。またカールたるドミートリイにはロシア風の泥臭さ、信仰深さが与えられ、フランツたるイワンはヨーロッパのインテリ風に仕立てられた形で描かれている。しかしこのような違いをではなくともとの骨組みに注目してみると「群盗」の外枠と内容の関係は「カラマーゾフの兄弟」のそれに非常に似通ってくるのだ。もちろん後者にはその他にアリョーシャが登場し、彼がすべての人物、とりわけ直接にはほとんど言葉を交わすことのない二人の兄の間をつないでいる、そしてさらにゾシマ長老とともにかかる外枠をも一構成要素とする最終的な外枠をその外側に作って、この作品での神の存在を問う姿勢を「群盗」におけるよりも格段に強くしてはいる。

## 2-3

フォードルにドミートリイとイワンの兄弟をフランツとカールの兄弟に — フォードル自身からにしても、彼自身に対してもアイロニカルに — 似せて語らせた作者は、さらに今度は自らこの兄弟の各々最も彼らしい所で読者にシラーの名を思い浮かばせる。すなわち第3編第3章以下の3章と第5編第3章以下の3章、ドミートリイの最もドミートリイらしい箇所、イワンの最もイワンらしい箇所です。ここではしかもドミートリイとイワンの各々が道ゆくアリョーシャを偶然呼び止め自分から心の内を吐露する形をとる、いずれの部分もほとんどドミートリイ、そしてイワンのいわば科白で占められており、しかも等しく三つの章から成り立つ、またアリョーシャと出会う様だけではなく別れの様まで似ている等<sup>19)</sup> ある対称性さえ感じられる所だ。ということはここには作者がそうしようとする意図があったと考えていいのだが、そうとすれば双方にシラーの句を引用させていることも意図的と考えていいことになる。ドミートリイもイワンも聖書や2・3の詩人の詩句 — ドミートリイの場合はネクラーフ、ゲーテ、シラー、イワンの場合はシラー、チュッチェフ、ポレジャーエフ — を引きながら本題に入っていく。しかしいずれの場合も彼らが語る本題に最も近いのはシラーの詩句だ。このことはドミートリイの場合、より直接的ではっきりしている。

彼は今これまで誰にも語ったことのない自分の過去を、自分を理解し得るただ一人の者とも思うアリョーシャに語ろうとしている。そしてその過去を語る前に今の自分の状態を人間の全



体をバックに描いてみる、それが情熱的、そして突発的でさえある彼の「エレウシスの祭り」および「歓喜に寄せて」——内容的に見ても本来あまり関係のなさそうなこの二つは彼にあっては不可分といえるほどに結びついているのだ——からの引用の意味であろう。惨めさに満ちた未開の人間たち、心に安らぎを持つことなく屈辱の日々を過ごす人間たち、この人間たちに対してケレースはその汚辱の生活から抜け出すためには大地の恵みに浴せよと言う。しかしその人間たちの一人、彼ドミートリイは意識して大地と交わることは出来ない。出来ることはただ汚辱の中にあっても主への讃歌を歌いあげることだ。そしてその内容とは、喜びは——それは彼にとって神と同義であろう——すべてのものにそれぞれ適したものを、虫けらにも情欲を与えるということだ。そしてこの情欲を与えられた者がそれに浸りながらも神を讃えて歌いあげる、これがドミートリイの場合である。そしてこの讃歌を歌いあげようとする意志は作品の最後までなくなることはない<sup>20)</sup>。

ドミートリイの場合のように直接的に名は挙げられないにせよ——その代わり一層意識的な形で——イワンの場合もそこで語られるテーマがシラーと関係している。ここでは先ず「諦め (Resignation)」の中のある詩句が「……俺は自分の入場券は急いで返す事にするよ……」の形で使われ<sup>21)</sup>、少し間を置いて「憧れ (Sehnsucht)」から詩句「心の告げること信ぜよ。/天よりの保証はすでになし」<sup>22)</sup>が引用されるが、一方はいわば神の理不尽に対する人間の反抗の言葉であり、他方は信仰を持つ者の神に対する絶対の帰依を示す言葉だ。しかもこの反抗と絶対的帰依は彼イワンの生の中でも大きい意味を持つ。反抗する者が自らの唯一の救いとしての絶対的帰依を知りながら、それを実行に移すことができない、これが彼の場合だからである。そしてこのことを端的に示すのがそれに続く彼の叙事詩「大審問官」だ。

ここで問題になっているのは、もはや神なくしても人類を「救う」ことだ。この大審問官によれば人間というのは苦痛の多い自由意志での神への愛 (信仰) という幸福より、日々のパンを間違いなく与えられ安穩にくらせる幸福をずっと強く望んでいる。彼は神の名において無神論 (悪魔) と結託し、自ら人神となってこの人間を「救おう」と考える。このような彼にとって1500年以上もたってから急にこの世界に現われてきたキリストは既に邪魔な存在である。彼はこのキリストを明日火刑に処することを決める。そしてその根拠としてか相手に自分たちのそれまでの行動について説明するのだが、彼は一方では自分のかような言動に対するキリストの反応を待ってもいるのだ。そしてその答としてか無言の口づけが返ってきた時、彼は心を揺さぶられながらキリストを解放する、しかし自分の行動を変えることはないのである。

もちろん彼等、すなわちドミートリイとイワンの抱える問題はカールとフランツのそれを大きく越えるし、彼等を主要人物として進んでいく話の筋も後の二人のそれよりはるかに緻密だ。またシラーからの引用はすでに「群盗」からではなく他の作品からのものになるし、またそれさえ単に借物であってドストエフスキー的に大きく解釈し直されたものとなる。が、いずれにせよドミートリイもイワンもシラーの詩句の引用から本題に入っていき、しかもそのような共通性がありながら、その引用の仕方には一方は自由に、他方は正確に、一方は追体験的、他方は識者風にと対称性があり、また話すことにも一方のは自分の行動や心情、他方のは自分

の考え、理論というように各々の性質に由来する違いがあること、さらにこの各々の性質はいまだカールとフランツの性質への類似性を持っており、しかもこれが多分に作者の意図によるのだということを指摘したいのだ。各々が話す内容そのものに入っていけば他にも語るべきこともあるが——事実チジェフスキーとリングスタドはこの内容に関しても多くのことを語っている——語ってももはや新しいことはあまり語れないだろう。また前にも触れたような理由から二人の作家の類似性、あるいは影響関係をことさらに重視してことを見ることに疑問を感じないでもない。今はやはりこのような外枠の類似という範囲にとどまりたいのだ。

とはいえこの二人の兄を、このように外枠の形でではあれとにかくシラーと関係づけると、さらに残りのアリョーシャもそうしたくなる。そしてこれはさ程無理なことでも難しいことでもない。アリョーシャはすでに他人が引用するシラーの詩句がそれとすぐに分かる様に描かれており、自らがシラーを引用することはないにせよやはり彼もかなりシラーについては知っているからだ。しかも彼は自分の本性に従って行動しても他人のすべての意に適っている者、他人の中にあるその人の最も人間的な部分を開く者、自分の言行が神の意に適っていると自覚できる者として描かれている。まさにシラーが「美的教育」のなかで理想とした人物そのままの様だが、このことから今までも度々彼の性情がシラーのいう美しき魂（さらに美的な状態、情感文学の最高位としての牧歌の状態）と関係あることが指摘されてきた。

が、アリョーシャとシラーの「美しき魂」の関係はそう単純ではないようである。例えばゾシマ長老の説教の中に「……偉大にして美しい何事か……」<sup>23)</sup>という言葉があるが、江川訳の注によれば、これはシラーの美学の本質を表す言葉として当時のロシアで広く使われていたという。注目すべきはこの言葉が否定的な意味で使われていることだ。ゾシマ長老にとってこれはまだ人文主義的、非信仰的、ヨーロッパ的なものなのであろう。事実「美しい魂」にこだわらないでアリョーシャ（アレクセイ）を見る時に先ず気付くのは、何よりも宗教的要素、とりわけ反「カトリック的」なキリスト教の要素であろう。ここではまた大地も特別の意味を持っているようだし、さらに神の人アレクセイの伝説を一つの要素として取り入れていると言われてもいる<sup>24)</sup>。これに加えて、よくアリョーシャと同時に語られるゾシマ長老の人格的要素までも考慮するとことは益々多様になって行く、結果的にアリョーシャにおける「シラー的要素」は拡散し、あるいは底に沈んで影薄くなり、その直接的影響等の指摘は難しいものとなるだろう。しかしこのことが直ちにシラーとアリョーシャの間に関係はないという結論にはならない。というのも彼がシラーをかなり知っていることは確実であり、また彼がかかる二人の兄との関係の中で描かれている、さらに結果的にはあれ彼の性向がシラーの理想の人間像と重なることは事実だからだ<sup>25)</sup>。

### 3

ドミートリイ、イワン、アリョーシャは「カラマーゾフ」の諸性質、先に挙げた混沌として混じりあう諸性質の一部を強調された人物であろう。いずれもがその源である父親のフォード

ルと同じくやはりそのすべての要素を含む複雑な人物ではあるのだが、さしあたっては、そして結局はこの父親が持つ力の一部を極端な形で、しかし肯定的な方向に強調された形で描かれている。すなわちこの三人はそれぞれ生命力、神への懐疑、神の意にかなう心に満ちた人間なのだ<sup>261</sup>。ドストエフスキーはそれまでの諸作品の中でも度々これらのタイプの人々を描いてきており、我々も彼の作品の中でのこの三つのタイプの人物を比較的容易に系譜化できる。そして結果的に最後の作品となったこの作品の中で、それらの人物の性質が一部を強調され、入れ替えられ、あるいは新しい要素を加えられたりして、一人の父のもとに生まれた形で、また神の存在を問うに最も効果的に配置された形で一堂に集められたのだ。

そしてここでこの三人のすべて、とりわけ上の二人が前述のようにシラーと関係付けられていると解してみると、その後はどうしても次のように言いたい誘惑に駆られる。すなわちドミートリイ、イワン、アリョーシャの三人は単に並列的に配置されているのではない、彼らの関係はシラーの「美的教育」における素材・形式・遊戯の関係、または彼のいう素朴文学・風刺文学・牧歌の関係に似ているのではないかということだ。その際素材・形式・遊戯の各概念を人間の性状を表わす概念と見、素朴文学・風刺文学・牧歌の各々の概念から文学の概念を取り去ってそれを作る詩人の心の状態をイメージすれば、この二組の三つの言葉の並びは各々ほぼ同じ意味で重ね合わさる、そしてこの三つの言葉のこのような組み合わせに三人の兄弟の並びが重なるのだ。その際第1項は一般に第3項の基盤となり、第2項は第1項を開花、深化させ、さらにこれを第3項へと止揚する手だてとなる。第1項も第2項もその存在からして互いに相手の存在を前提とし、また二つで対になって、いや結局は個々の存在のままでも既に第3項を前提としているのだ。

すなわちこの三人の並びはいわば弁証法的並びで、ドミートリイとイワンはアリョーシャに至るため一つの過程となる。事実この作品でアリョーシャは、一方では確かに他の主要人物、とりわけ二人の兄の個性をよりはっきりさせる機能を果たしているが、同時に兄たちの持つすべてを見、すべてを吸収しているのだ。三兄弟のこのような並びはこの作品そのものの中でもすでに意味あることだが、これはこの作品を作者の言葉通りに受取り、アリョーシャがより行動的な主人公として登場するはずのこの続編（あるいは本編）の前編であると位置付ければ一層意味を持ってくる。そしてこのことはこの作品の中で描写に精彩があるのが誰であるかとも関係しよう。というのはここでそうあるのはアリョーシャではなくむしろドミートリイとイワンだからだ。しかし精彩あるように描かれたものが常に描かれる最終の目標だとも限らない。問題を投げかける方、攻める方、行動する方は常に鋭い、そして一見理に適い、エネルギーであり、また多彩だ。対して受けとめる方、答える方は多くの場合、語れば一様である行為しかとれない。その究極的な例を挙げれば大審問官に無言のまま口づけをしたキリストのようである。アリョーシャは目立たぬながらも一番多くの場面に登場する。彼はスメルジャコフ以外のすべての人物に好かれ、ほとんどの主要人物に接してその心の良い部分を開き、これらの人物の間を結んでいる、そうしながら筋の展開を土台で支え、一方ではそれを通じて自ら成長している、主人公はやはり彼なのだ。彼を核としてカラマーゾフの三人の兄弟の関係が、並

列的な並びと弁証法的な並びが表裏一体になった形で描かれている。そしてそれに四人目のスメルジャコフが加わり、さらにフォードル等他の人物が加わって人的関係に広がりを見せ、彼等の輪郭に弾力性を見せる。だからこそその味気ない図式的輪郭、つまりかの弁証法的並び、のみならず並列的並びも直接には外に現われずに済むのである。

ゴロソフケルの「ドストエフスキーとカント」<sup>27)</sup>は非常に興味あるテーマを扱っている。この小説全体がカントの「純粹理性批判」における四つのアンチテーゼ、ひいては四つのアンチノミーそのものに対する反論として書かれている、そしてその際のアンチテーゼ側の先鋒がイワンだというのだ。そこに書いてあることの多くはうなずける。そしてそこで言われていること等に注目すれば、「ドン・カルロス」の中のポーザ侯の科白を引用してのシラーの影響の強調などは色あせてしまう。しかしこのように彼の論にうなずいたからといって「ドストエフスキーとシラー」の関係を否定したことにはならない。テキストに明示されたデータ、つまり度々のシラーの引用からすれば前者についてより後者について語る方がはるかに確実だからだ。しかし一方ではテキスト内の明示もやはり作者の周到な構想に基づいているのだから、すぐに見えるものが最も重要だとは限らないことも事実だ。結局双方ともに語り得ると思うのだが、この場はそれゆえとりあえずシラーとの関係は作品の輪郭の部分において、カントとの関係は内容の部分において——といっても内容そのものよりは内容を語る際の器の部分においてだが——より濃厚であると解して、この二人の影を共に認めておきたい。しかし内容と輪郭とはどのような形かでかならず呼応しているものではある<sup>28)</sup>。

#### 4

ひとつのテキストの中に他のテキストの痕跡、あるいは影が見えることはとりわけて珍しいことではない。問題はそれが見える時と見えない時があるということだ。例えば——あまり意味のある所ではないし、また拾遺的でもあるが——刑が執行されようとする時の死刑囚の心の描写、これは「白痴」の主人公ムイシュキン公爵が語る<sup>29)</sup>ものが有名だが、この「カラマーゾフの兄弟」においても検事イッポリートの口を通じて語られているし<sup>30)</sup>、さらに言えばイワンによっても語られている<sup>31)</sup>。刑場でその執行を待つ者の心の描写は一般に作家自身の体験に基づくとされており、実際それは間違いないことであろう。しかし「群盗」を読んでいる者ならその中のローラのある科白の中での刑場の描写<sup>32)</sup>をも思い出し、そこにもシラーの痕跡を見てしまうかもしれない。そしてこれは——二つの間にかなりの違いがあることは事実なのだが——かの「死刑」を体験する前すでに「シラーを丸暗記し、シラーの言葉で話し、シラーの言葉でうわごとをいっていた」<sup>33)</sup>という体験をしているドストエフスキーのことであってみれば、あながち強引な見方でもないのだ<sup>34)</sup>。

またこれなどより一層重大な内容を含む叙事詩「大審問官」についてもこのことが言える。この「叙事詩」の形成には一般に作家の日記等にしばしば見られる反カトリック的要素が大きい位置を占めていると言われているし<sup>35)</sup>、ヴォルテールの「カンディード」に対する興味も関

係あるといわれている<sup>36)</sup>。それに先に挙げたゴロソフケルの所説などを考慮すると純粋な形でのシラーの影響云々はそう簡単には言えないようだ。しかし一方ではこれが「大審問官」という特異なその名称、その舞台が等しく16世紀スペインであること、人物が同じように非常に高齢であること等から、しばしばこれと「ドン・カルロス」5幕10場に登場する大審問官との関係が指摘されてきたし、また自由の概念についてのポーザの言、それに対する国王の言と関係付けられてきた。「ドン・カルロス」が「群盗」と並んでドストエフスキーが最も好んだと思われるシラーの作品であり、彼にあつてはおそらく「群盗」以上に理想主義者シラーと結びついていることからして、そしてまた注5)で挙げた「創作ノート」のメモ等から見ても、この作品が何らかの影響を与えていることは間違いあるまい。政治的には敗れても個人的には保ち得るシラーの人間の自由、とりわけ「ドン・カルロス」完成後フランス革命の野蛮性に対抗する形で形作られた人間の本性に基づく自律的な自由の概念は、キリスト教の「カトリック」的なあり方や来たるべき社会主義（の野蛮性）に対抗して語られるドストエフスキーの自由の概念と同じく、やはり人間性の本質に深く根ざしたものだからだ。我々はしかしここでもやはり内容に関する類似性について語ることを止め、大審問官のイメージ<sup>37)</sup>にさらに拾遺的に次のことをも付け加えて、それをも「ドン・カルロス」の痕跡の一つと見てみたい。すなわち自分の中に宿る人間性・人間味をあえて凍らせ、自分の欺瞞に気づきながらも一種の矜持を保って生きて行く体制側の指導者の姿である。

国王フェリッペ、そしてその師である大審問官は今の体制、いわば彼らにとっての聖俗界一体の秩序を守らなければならない。人前で取り乱し涙さえ見せてしまった王は、今やまた心を閉ざし、人間性の声を断つても反逆者である息子（しかも一人息子、皇太子、自分の妻を奪う者、信頼した臣下を奪った者、この臣下の裏切りの地上における痕跡、自分の国と権力を奪う者、自分を軽蔑する者、今の秩序を変えようとする者、明日の世界に属する者）を宗教裁判に渡すつもりで大審問官を呼ぶ。彼はそれまでに王者としての自分の孤独をしみじみと感じ、ポーザ侯に絶大な信頼を与えもしたし、他方またこの寵臣に関し、そして妻に関してかの息子への嫉妬に駆られもした。さらにまた国家の、あるいは人間社会の理想を追う若者たちに共鳴を感じさえもした。が、結局はこれらの感情の動きも未来への可能性もすべて抹殺するために大審問官の助言を求めるのだ。そしてこの大審問官はといえば、その存在からしてすでに今の秩序を守るべき使命、俗界の王を指導しながらカトリックを保つべき使命そのものである。彼にあつては人間の生はもはやためらいなく単純化され、ことは明快に結論付けられる。「信仰の前には人の本性の声は通用しない」<sup>38)</sup>「人間はあなたにとっては数にすぎぬ、それ以上のものではない」<sup>39)</sup>、王との会話の中でたまたま語られた彼の言葉は彼の存在のあり方を端的に語っている。静かで冷たい彼の言葉、宗教裁判の得難い獲物であるポーザを何年にもわたってヨーロッパ中を泳がせておいた彼のこの言葉はしかし、同時に彼が多くのもを見てきた、そして今も見ていることを確実に感じさせもするのだ。

5幕10場の彼等の会話は行数にして150行にも満たないが、しかし作品全体に厚みを加える非常に興味あるものだ。ポーザとカルロスの理想の実現を阻む巨大な壁として存在する王と大

審問官だが、しかし彼らはいずれもがその程度こそは違え、人間性の多くを知りながらその任務ゆえに自分のそれを押し殺しているとも解し得るからである。そしてこのように解されたこの二人のようにその際聖俗界の権力の維持をその役目の前面に持つてくるのではなく、大衆に対してその器に合った「幸福」を授けようとする「善意」——確かに詭弁なのだが、あまりにも人間の現実に即している——を前面に持つてくれば、それはイワンの大審問官となる。すなわち大衆の一般的傾向を知る彼は、大衆を「愛し」ながらも自由を扱い得ぬ大衆に絶望し、愚民政策的処置、あるいは奴隸的扱いで彼等を満足させざるを得ない。彼にはある種の確信、自信、誇り（それらはしかし外から見れば慢心である）は確かにあるのだが、心の底では自分の欺瞞を意識しており、真の神を前にする時はやはりその存在を揺るがされざるを得ない、そしてそのような自分の存在を一種の悲劇的存在とさえ捉えてもいる。が、しかしそれ故にこそ彼は大衆に対してはあたかも神同様の確信を持つているかのごとく振る舞うのである。

もちろんものの一面にあえて痕跡を見、それを例示の一つに加えたからとて、いや他の論者によって今まで度々挙げられてきたこれよりはずっと的確な例のすべてを是としたとて、シラーの痕跡がこの作品の至る所にある云々はあまり声高に言うべきことではないのであろう。ことは結局シラーを意識して読めばそう見えるというだけのこと、関係のありそうなものを拾って繋げばはっきりと見えもするが、それらを元の所に戻せば影が薄くなってしまおうという形のものだからだ。とりわけ作品の後半になれば彼の名もなくなり、それに従って彼は一層読者の意識から消えていく。が、それはそれでいいのであろう。消えたままでも読者の中のドミートリイ、イワン、アリョーシャ等のイメージは厚みを加えていくからだ。そしてそれでもそこに残っているかも知れないシラー的要素が、長い間出てこなかった彼の名がそれほどの意味もないような形で——しかしそれはしばらくの後、より重みを持つてまた繰り返され、そしてこの二度目の後はほとんど間を置かず、作者名が言われぬまま彼の有名な詩「鐘の歌」のエピグラフの一句が使用され、そして注17)で触れたフランツの科白を利用しての父親論が展開される——裁判の場で再び挙げられた時に、これにいかなる意味を持たせるかを決定するのだ。

すなわちこれはただドミートリイの性質を述べるためだけにたまたま名を挙げられたにすぎないのか、シラーを、そして「群盗」を思い出すよう作者が読者に信号を送っていると解すべきなのか。さらに後者と取った読者の解釈にしても、作者が自分の先達あるいは対抗者としてシラーを常に意識し、その結果としてシラーをこの作品の内容と直接的かつ本質的に関係させたと見るのか、あるいは作者が子供の時からの長いシラーとの関わりに思いを致し、その記念にと半ば余裕を持つて名を挙げたと見るのか、あるいは——程度の違いはいろいろあろうが、ともあれ——この二つの混じり合いと見るのか、いずれの場合においても——作者が作品中にしばしばシラーの名を挙げ、またおそらくは生涯にわたって常に彼に関心を抱き、また作品制作当時はそれまで以上に彼および「群盗」について語っていることが明らかなのだから——それなりの説明は可能である。この小論もその混じり合いの一つ、その可能性の一つとしてこの小説の輪郭と「群盗」の輪郭について語ってみた、そして内容上の類似をその外枠でもって遠くから少し余裕を持つて支えようとするのである。

ところでこの作品を読んでこんなふうを感じる者はもちろんのことシラーの作品を読んだことのある者だけなのだが、このような者にとっては、ドストエフスキーが例えば「群盗」を上述のような形で扱ったことは「群盗」解釈のひとつの刺激となる。というのもこの戯曲を読むにあたってはフランツの意味が全体的にもう少し強調されてもいいように思われるからだ。ドストエフスキーが子供の時モチャーロフが演じたカールに大いに感激したことは知られている。しかしだからといってカールとフランツの人格上の価値、あるいは登場人物としての価値に大きい違いを設けたのかどうかは分からない、また仮にその時はそうだとした場合中期の作品のシラー引用の仕方から考えてそれが晩年までそうであったとはいえないようだ。いずれにせよこの「カラマーゾフの兄弟」では二人の間にそれほど大きな価値的差は設けていない。そして彼が二人をそのように解釈したのは彼の曲解、あるいは深読みなのか、あるいはもともとそう解釈できる素地が作品中にあるのか……そしてもしそのような素地が作品中にあるのだとすれば、そこを詳しく読むことにより少し別の観点からこの戯曲を見ることもできよう。このことはまた「ドン・カルロス」の5幕10場についても言える。国王および大審問官が、人間にとって自由の行使がいかに難しいか、それがいかに重荷であるかをイワンの大審問官と同じようにまで知っている（わけではないにせよ）、少なくとも本来あるべき世界を知り、また自己の欺瞞を知ってそれに耐えているのだとすれば、この作品を解する視点は今までとはいくらか違って来るからだ。ドストエフスキーがシラーに影響を与えることは決してないのだが、シラーを見る我々読者にはこんなふうにして影響を与えることもあり得るのである。

\*

\*

\*

ドストエフスキーに対するシラーの影響を作品外のデータを使って証明することや、この二人の存在の類似性を細かに述べるのは筆者の能力をはるかに越える。これこそ — この報告書のもともとの課題に帰ると — CD-ROMがその威力を発揮する分野だろうが、そのためにはまず双方の全集がCD-ROM化されなければならない。その上でこんどは利用者が思い通りに利用できる体制が必要なのだが、この利用のためにはしかし利用者自身いろいろな側面を理解吸収できる弾力的なソフトウェアになってなければならないのだろう。「カラマーゾフの兄弟」のテキスト分析（プロットやテーマ別の単位設定、単位間の関係の分析、登場人物の性格の要素の分析等々）、ドストエフスキーの他の作品の同じような分析、「カラマーゾフの兄弟」と他の作品の（単位ごとの）関係、シラーの作品の分析、ドストエフスキーの精神形成に影響を与えた人々とその形成過程についてのデータ、とりわけシラーとの関係のデータ等がその際の基本的データになるはずである。これらのデータを組み合わせながら視点をシラーとの関係に置いて「カラマーゾフの兄弟」をさらに分析していくのだが、これほどに徹底してやるにはやはりその最低の条件として二人の作品を原文で読めなければなるまい。今回は予算がついてから3・4か月で報告書を作らねばならぬこともあり、前々から関心のあった二人の作家について語ってみた。原文の読める二人の作家を上挙げたような形で比べてみることは他日を期したい。

注

- 1) Peterson, Otto P.: Schiller in Russland 1785-1805, New York, 1934  
 Čyževskij D.: Schiller und die "Brüder Kramazov", Zeitschrift für slavische Philologie 6 (1929), S.1-42  
 Kóstká, Edward K.: Schiller in Russian Literature, Philadelphia, 1965  
 Lyngstad, Alexandra H.: Dostoevskij and Schiller, The Hague, 1975  
 井桁貞義: シラーとドストエフスキー — 問題設定のために — 早稲田大学「比較文学年誌」第14号 (1979), p.20-45
- 2) アリョーシャに対するドミートリイの言葉「……イワンが俺たちより偉いなんて……」(16-p.275, 下線筆者)の部分のドイツ語訳 höher からの語。またこの語は論文の後の方で (ibid. S.30)述べられるように、「群盗」3幕2場でのコジンスキーに対するカールの科白の中にもある (Bd.3 S.84)。この場合は並の上に立つ者、非凡なる者で良いであろうが、論者チジェフスキーがこれをイワン (やラスコーリニコフ等)にだけでなく、アリョーシャやゾシマ長老にも関係させていることを考慮して文中のように訳しておいた。(引用箇所は後述の江川訳 (II-p.287, 下線筆者)では「……おれたちより高い人間だと……」となっている。なおドストエフスキーの作品の巻数、およびページ数はことわりがない限りすべて新潮社刊「決定版ドストエフスキー全集 (本作品は第15巻, 16巻で訳者は原卓也)」, シラーの引用は Nationalausgabeによる。以下同じ)。
- 3) ほとんどの事実は上述の論文すべて、少なくとも複数のものに取り上げられている。引用箇所の注が比較的詳しいチジェフスキーの論文によれば — 前述の通りこれはここでは一番古いものでもあるが — 彼の語る事実も多くの人々の研究の積み重ねであることが分かる。もちろん情報量の一番多いリングスタドのものにはそこだけのものがかなりある。
- 4) とはいえこれとても新しいまとめ方とは必ずしも言えないかもしれない。リングスタドは上記の書の中 (p.49f)で「……『群盗』はドストエフスキーに場面、性格およびテーマ設定のための示唆を与え、『ドン・カルロス』はこの小説の決定的な章、すなわち『大審問官』に影響を及ぼした。シラーの論文『人間の美的教育について』はカラマーゾフの兄弟たちによって表わされた三つの心理学的タイプの知的枠組を用意し……最後にドミートリイとイワンはシラーの詩からの引用を通じて、この小説のイデオロギー構造の本質的な部分となる重要な考えを取り入れた。……」と言っているが、以下の小論もやはりこの枠内から — 大まかな輪郭ゆえその内容構成には工夫を加えられ得ようが — 出ることは出来まい。
- 5) 作品中ではフォードル、ドミートリイ、イワン、イッポリート、フェチュコーウィチの5人がシラーに言及する。このほか「カラマーゾフの兄弟」創作ノート (第27巻)にも彼の名前等が見られる。本文の箇所とダブルところもあるがここでは彼の名あるいは彼の作品名が7度挙げられている。その中では特に 164ページの2回の引用が興味深い。そこでは大審問官の言葉の中に「……シラーは歓喜を歌う……」という部分があり、またイワンが口にする彼の詩句がメモされている。作者がこの場面で彼を明確に意識していたことが読み取れよう。さらに 247ページにはモークロエでの予審中にドミートリイが口にする彼の句がメモされているし、139ページのゾシマ長老と回りの人の会話用のメモらしい所には「ヨブその人……親戚たち、その親戚が — カール・モール」というような文もある。
- 6) 江川卓 訳: カラマーゾフの兄弟 I, II (世界文学全集45, 46) (集英社 1979)
- 7) この小論で言及していないものを重要性の大小をあまり問わずに一部挙げてみれば: 遊戯と芸術についてのアリョーシャの言、人間におけるうじ虫/南京虫 (Wurm/ Insekt) の要素、父子間・兄弟間の嫉妬のモチーフ、思考と行為の関係におけるイワンとヴァレンシュタインの類似、少年たちの誓い等々



- 8) コストカ: ibd. p.248, チジェフスキーも同じようなことを言っている (ibd. S.3).
- 9) この作品から引用する人物はフォードル (15-84f, p.107, p.109), ドミートリイ (15-p.183), フェチュコーウィチ (16-p.450) の3人である。
- 10) 21-p.373, N.L.オズミードフ宛 1880年8月18日
- 11) 別巻 p.478f
- 12) この対比に関してリングスタドはコマローヴィッチが的確な解釈をしたとし、彼の説を次のように紹介している (ibd. p.76)。「父親による『群盗』のほのめかしは、彼によれば構成上の技巧であって、ドストエフスキーはその技巧、すなわち喜劇的な取り替えをする中で、小説中の争いの結末をあらかじめ語っているのだ。実際過ってそのように同一視したことの中には二重のアイロニーが含まれている……」
- 13) 15-p.168
- 14) 15-p.203f
- 15) 第三者、例えばスメルジャコフもイワン的一面を見抜いており、兄弟の中では彼が最も父親に似ていると述べている (16-p.320)。
- 16) 内村剛介: 人類の知的遺産51, ドストエフスキー (講談社 1978), p.269f, 江川卓: 謎解き「カラマーゾフの兄弟」 (新潮社 1991), p.11ff
- 17) シラーがシェイクスピアの影響を受けていることは一般に言われていることであり、またモール家とグロスター家の父子関係が似ていることはリングスタドのある注 (ibd. p.54) でも指摘されている。この場合フランツとエドモンドとの大きな違いは行動的かどうか、そして神が念頭にあるかどうかであろう。またこの科白にとりわけて言及するのは、一つにはドストエフスキー自身シェイクスピアからかなり引用していること、そして同じ内容のことがこの「カラマーゾフの兄弟」の中でも語られていることを指摘したいからだ。それは裁判の際のフェチュコーウィチの弁論の中でだが (16-p.450)、これはむしろスメルジャコフあたりが——その機会さえあれば——言いそうな言葉のように思われる。そしてこのスメルジャコフは一般にイワンとの密接な関係の中で捉えられているのだ。
- 18) 少なくとも彼の言葉から彼がいかに兄の方をかわいがっていたかは見てとれる。弟に対してはこれに見合った言葉がないことから、彼が過去において、そして今もまたいかに一方のみ依怙品直し、一方にのみ期待しているかは感じ取れよう。また彼は領内の若い貴族ヘルマンからも自分を侮辱したと思われる (Bd.3, S.40)。さらに彼自身「……父や祖父の罪悪が三代目、四代目に……」 (Bd.3, S.12) 等と語っており、この家系の存在の背景には必ずしも晴れ晴れとしたものを感じさせない。
- 19) 双方の兄のアリョーシャに対する関係が彼等自身の言葉、あるいは引用の中に含まれているという事も対称性の中に入るのであろう。「情欲は虫けらに与えられたもの、/だが天使は神の御前に立つ」 (15-p.127) と歌うドミートリイにあつては、彼自身が虫けらであり、アリョーシャは天使である。また「相手 (キリスト・筆者注) はふいに無言のまま老人 (大審問官・筆者注) に歩み寄ると……老人の唇にそっとキスする……」 (15-p.316) というイワンにあつては、結果的に彼自身が大審問官、そしてアリョーシャがキリストである。
- 20) 大地はドミートリイによって惨めさからの救済の場、惨めな存在ながらも歓喜にむせぶ場と捉えられており、この二つの詩を結ぶ接点になっていると思われる。なおドミートリイの名はここに登場する農耕の女神ケレースのギリシャ名、デーメーテルに由来するという (江川: ibd. p.218, または翻訳「カラマーゾフの兄弟I」注, p.476)。
- 21) 15-p.295, Bd.1, S.166
- 22) 15-p.298, Bd.2-I, S.197
- 23) 江川訳「カラマーゾフの兄弟I」p.408 (「決定版」では 15-p.383 で「何か偉大で立派なこと」と訳されている)。なお訳注はp.492

- 24) ヴェトロフスカヤの説として、江川: ibd. P. 74ff, 原: 解題 16-p. 489, 中村健之介: ドストエフスキー人物事典(朝日新聞社 1990) p. 461
- 25) このアリョーシャを無理にシラーおよび「群盗」と結びつけることができないわけではない。というのも「群盗」を書いた頃のシラーはちょうど肉体的なもの、精神的なもの、いわば第1項と第2項との間に中間項を求める必要性を自分の卒業論文の中で書いており、彼のその後の哲学的思索は端的に言えばかかる中間項、すなわち第3の項を求めることそのものであったといってもよいからだ。それゆえことをシラー流に見た場合アリョーシャはかかる第3項そのものであり、彼の存在は結局シラーのそれ以降の哲学的思索全活動に対応するといえよう。とはいえこれはもちろん極端な言い方である。第3項的な人物を描くというのは単にシラーだけの望みであったわけではなく、中間項を求める傾向を持つ人たちの共通の望みだからだ。ドストエフスキーもシラーと同じくそのような作家だったというのが事実即ちその言い方であろう。また第3項は多くの場合抽象的な形ですでに他の二つの項より先に存在しているのかもしれない。しかしそのような段階での第3項にはまだ輪郭がないし、たとえあってもそこには弾力性がない。それらを得るためには他の二つの項、とりわけ第2項を深め、吟味する必要がある。すなわち例えばムイシュキンからアリョーシャに至るまでには、イワンやフォードル等が必要であったわけである。
- 26) そして今は加えてもいいのだろうが、彼らの「兄弟」スメルジャコフもまたそうで、彼の場合は反対にそれらのものすべてが — よく言われるようにとりわけイワンと共通する部分が — 否定的な方向に強調された形で描かれている。彼が三人の兄弟のすべてから — しかし各々の特徴に沿った形で — 毛嫌いされている、かのアリョーシャにさえも嫌われていることはこれと関係がある。
- 27) Я. 3. Голосфел: ドストエフスキーとカント(みすず書房 1988)
- 28) シラーもまたカントへの抗議あるいは対決から自分の哲学を深めたことは知られている。ドストエフスキーのカントへの対決がこの小説の内容だとすれば、その外枠がやはりそのような過程をたどったシラーであることは意味のないことではない。
- 29) 9-p. 28ff
- 30) 16-p. 418
- 31) 15-p. 288f
- 32) Bd. 3, S. 62f
- 33) 20-p. 46, 1840年1月1日付 兄ミハイル宛
- 34) また「カラマーゾフの兄弟」の父殺しのモデルの一つが実際に起こった出来事、「イリンスキー事件」であったことは知られているし、父の無残な死、そしてヒョードロフの学説等も何らかの影響を与えたともいわれている。しかしそうであることとこの作品の父殺しが「群盗」のそれと関係するという事は矛盾することではない。一般に何らかの形で前々から心の奥にあったイメージが新たな体験等と結びつき — あるいはその逆の場合もあるが — 重層的な形を取って一層強いイメージになることは珍しいことではない。
- 35) 江川: ibd. p. 93, 高野雅之: ロシア思想史(早稲田大学出版部 1989) p. 308ff
- 36) 江川: ibd. p. 253ff
- 37) フィリペ王の後ろに控えている大審問官は前面にこそは出ないが、やはり聖俗一体の権力機構となっているカトリックの精神的支えとなっている。一方イワンの大審問官は聖俗の権力を一身に具していそうだという意味でかの二人の間、あるいは二人を重ね合わせたような地位にいるといえよう。さらにあえて言えば — 若いイワンの作品の主人公であるせい — 歳のわりにはかなり情熱的だという意味でも二人の中間にいる。
- 38) Bd. 7-1. S. 640
- 39) Bd. 7-1. S. 638